

想い出

太平洋の波は静かで青く、一片の雲もなく船は心持よくゆれて我が船団は行く。「海の民なら男なら、みんな一度はあこがれた太平洋の――」と、大声で一斉に軍歌を歌う。士氣いよいよさかんである。我々はあと三時間でミッドウエー島に敵前上陸を敢行して、飛行場を建設する任務をもったわが第十二設営隊を含む十数隻の船団である。ふと見ると護衛の駆逐艦が戦列を離れて行く。「何だ何だ」と不審がる我々に「わが機動部隊は只今敵機動部隊と交戦中である」と知らされた。間もなく「直ちに待避せよ」との命令に急遽トラック島に帰港しなければならぬ。

洋上灯火管制を嚴重にしたが、八ノットの限界速力のボロ輸送船は石炭の火の粉を赤く吹き出して、我々は何度も膽を冷やす思いである。遙かなる水平線にもし敵が見えたら我々の命はないものと覚悟しなければならぬからだ。前日ボーイングが三機我々を襲ってきたが、敵はわが作戦を見抜いたのかも知れない。これが太平洋戦争の敗戦につながる序曲であった。

トラック島に集結、次の作戦命令により我々にニューアイルランド島ケビアンに飛行場建設の命が下った。ケビアンの人々は心よく我々を迎えてくれた。日本人が来て英国兵たちは慌てふためき逃げて行った様子を、身振り手振り面白おかしく我々に説明した。一年が経った。飛行場は完成したが帰る船がなく、我々はいつ帰れるかわからない。戦況は次第に悪化し空襲が激化した。

ズシンズシンと爆弾の響きが、身をひそめる防空壕に次第に近づいてくる気配がする。嬌声があがる。慰安婦の宿舎が直撃されたのだ。救助隊出動。赤い布を懷中電灯にまきつけて照らしながら、爆音の下を身を引き締めて負傷者をつぎ病室に運ばなければならなかった。

隊長は戦況の好転を願い「言霊によって敵を降伏させるのだ」と、朝礼時、隊員一同を一堂に集めて正座させ、南無天照大神と合唱させた。その御題目を唱える声がこだまして凄絶の極みであった。

ある夜半、全員集合で叩き起こされた。「敵が上陸してくる」との情報があったからだ。分隊伍長は一升びんをかついで相当酔っていた。「ああもうおしまいだ」と訳のわからないひとり言が暗闇に響く。硬直した兵隊の無言の列からタバコの赤い光だけがあちこちと動いていた。私もタバコを吸おうとそのひとつの赤い火に近づいていたら「もうこれで三人目だ、縁起が悪い」とどなりつけられた。

しばらく敵上陸の気配のないことが知らされ、ほっと安堵した時は白々と朝の気配が感じられる頃であった。敵襲来、警戒警報のサイレンがけたたましい。B2 9が悠々と飛翔している。味方の戦闘機は豆をいるようにパラパラと、敵の銃声はポツポツと火を吐く。雀と鷹の戦いに似て勝負は呆気ない。敵機を見上げながら私は一本の椰子の木をくるくる回っていた。

待望の船が来た。日本に帰れるのだ。船室に貼られた地図の上に敵潜水艦の出没地点が次々と書き加えられる。魚雷だ。危うくかわした魚雷は、一筋の航跡を海にのこして消えていった。右往左往、船は慎重に行動して時を過ごす。食糧が乏しい毎日の食事は、麦飯とパイアのすまし汁だけである。横須賀に着いた時は誰しも「よく無事で」と快哉を叫んだ。人の運命はサイの目で決まる。呉海兵団に戻り整列を受けた。四列横隊である。「番号、一番から十番までの者は何々警備隊行き、二十番までの者何々」。こうして兵隊の運命が決められる。私は新兵教育要員として講習を受けて、九州佐伯海兵団に勤務を命じられた。八紘一宇、神州不滅の帝国海軍を信じて懸命に新兵を教育して戦地に送った。教え子たちは喜んで出征したが、今思えば後味の悪い夢である。

和歌山県田辺市に田辺海兵団が新設され、私は赴任させられた。ある日、ふと目を覚ますと兵舎は焼夷弾で直撃され、火の海である。新兵たちは暑いので皆裸で禪ひとつで寝ていた。慌てた新兵たちは街の中まで禪ひとつでかけ回り、市民からそのぶざまな姿態に非難の声が集中した。「整列」と点呼しようとする雲間から敵戦闘機が下りて来る。「待機、待機」、バリバリと機銃掃射である。終戦ま近の八月頃は、夜はB29が爆弾を投下、昼は戦闘機の銃撃が激しく何ひとつできない状態が続いた。

広島に「ピカドン」が落ちた。士官たちは視察に出かけた。ピカツと光つてドンと音がすると一帯は廃虚と化した。小型のマツチ箱ぐらいの強力爆弾であるとか、さまざまな噂がささやかれていた。ついに重大ニュースがあると知らされ、全員防空壕の中で玉音を聴かされ、何が何だか分らないまま戦争は終結した。米軍の捕虜として重労働をうけるとか、男は皆去勢されるとか、いろいろデマが飛んで、その都度顔が青ざめる思いであった。

現在の日本は夢のような平和になれた天国である。戦争は絶対反対である。嵐の中を駆け抜けたわが青春をふりかえり、国を愛する心も必要ではないかと考えている。

※ この体験記は、上尾市発行「私の戦争体験」（昭和五十七年）に掲載されたものを、原文のまま再掲したものです。